に於て訂正されて居る所少くないが、然も後者にもまた正し得ず、加之新たに誤を生じてゐる所も少くない。今はたゞこの精鈔本にもかゝる點の存することを附記して、これを利用する人々の是正を希望して置く。

註① 經世大典の成つた時をこの月日に置くことについては、下に詳しく述べる。

② 藝文第五年第十一號口繪解說參照。

③ 站赤といふ語については曾て蒙古驛傳考に於て述べたが、その後諸家の考の發表されたもの少くない。近くは東洋學報第拾八卷第二號に、白鳥博士が「高麗史に見えたる蒙古語の解釋」と題して掲げられた論文の中にも、この語の解釋に及んで居られる。

④ 學術叢編卷二十三、大元馬政記跋。

⑤ 元史卷百八十一虞集の傳に、「有旨。采二輯本朝典故一。倣二唐宋會要一。脩二經世大典一。……集言。……蘇天爵……俱有二見聞一。可レ助二撰錄一。庶幾是書早成。」と見えて居る。

⑥ 前引の大元馬政記跋に見えて居る。

⑦ 尙一つの考へ方は、經世大典には驛傳門の下に站赤といふ目があつて、そうして驛傳門にも站赤目にもそれぞれ序文が附せられてあつたので、元文類の經世大典序錄には前者を收錄したのであるが、永樂大典蘸字韻下の站赤の目には後者を收めたのであらうと見ることである。かく見れば序錄と大典との間に於ける門名及び序文の相違を說明することは出來ようが、同時に經世大典の驛傳門の下には、站赤のみならず、その以外にもこの門に屬する他の目があつたことを認めなければなるまい。然るに經世大典序錄の驛傳門の序の下に、蘇天爵がこの門に屬する記事を隱括して附した小註は、本文に述べたやうに、悉く永樂大典所收經世大典の站赤に關する記事の抄出に外ならぬものであるから、これに依つて考へると、經世大典には驛傳門の下に、特に同義の站赤の一目のみを立てたものと見なければならぬことになり、說明し難き矛盾を生ずることになる。今暫く本文に述べた解釋を施して、後の研究を待つことゝする。